KAWAMOTO−NEWS

★ノルウェー・ノーベル賞委員会は、10月10日に、2014年のノーベル平和賞を、女性や子どもの権利を訴えてきたパキスタンのマララ・ユスフザイ（Malala Yousafzai）さん（17）とインドのカイラシュ・サトヤルティ（Kailash Satyarthi）さんの2人に授与すると発表しました。
以下は、これに伴いマララさんが、同日バーミンガムの公共図書館の講堂で行ったスピーチです。

マララさんのスピーチ

ノーベル平和賞という素晴らしい賞をいただけることを名誉に思います。この賞を受ける初めてのパキスタン人、初めての若い女性、初めての若者であることを誇りに思います。

そして、この賞をインドのカイラシュ・サティヤルティさんと分かち合えて、とてもうれしいです。子どもの権利と、隷属的な児童労働と闘う彼の素晴らしい仕事には刺激を受けます。

子どもの権利の保護に多くの方々が取り組んで下さっていることがうれしいですし、私は一人じゃないんだなって思えます。彼は本当にこの賞にふさわしい方です。

彼とこの賞を分かち合えることを、光栄に思います。

ノーベル平和賞を頂くことになる私たち２人は、一人がパキスタン、もう一人がインドの出身です。一人はヒンドゥー教、もう一人はイスラム教をあつく信仰しています。この事実は、パキスタンとインド、あるいは異なる宗教の間にいる人々に愛のメッセージとなって届くでしょう。そして私たちはお互いを支持し合っています。

肌の色や話す言語、信仰する宗教が問題なのではありません。お互いを人間として扱い、尊敬し合うべきなのです。そして、私たちは、子どもの権利、女性の権利、すべての人々の権利のために闘うべきです。

まずはじめに、私の家族、私を愛し支えてくれる親愛なる父母に感謝したいと思います。父がいつも言うように、父が何か特別なことをしてくれたわけではありませんが、父は私の翼を折らないでくれました。ありがたいことに父は翼を折るのではなく、私を羽ばたかせてくれ、目標を達成させてくれました。女の子が奴隷になるのが当然ではない世界、女の子が人生を前進する力を持てる世界があることを、彼は私に教えてくれました。

女性は母親や姉や妹、そして妻であるだけではなく、アイデンティティーを持ち、認知されるべきです。女の子は、男の子と同じだけの権利を持っているのです。

たとえ、私の弟が「マララはとてもよく扱われているのに、自分はそうじゃない」と思ったとしても、まぁ、それはそれでいいのです。

私がノーベル平和賞に決まったと知るまでのいきさつをお話ししたいと思います。

とても面白いことに、当時、私は化学の授業で電気分解の勉強をしていたんです。時間は１０時１５分だったと思います。ノーベル平和賞の発表はもう終わっている時間ですから、まさか自分に決まったなんて思いもしませんでした。１０時１５分になったとき、私は選に漏れたと確信していました。すると突然、先生が教室に入ってきて私を呼び、「大切なお話があるのよ」と言うのです。本当にびっくりしました。先生は「おめでとう。ノーベル平和賞に決まったわよ。子どもたちのために働いている立派な方と一緒にね」と言ってくれたのです。

感情をちゃんと表現するのって難しいなって思うのですが、とにかく、「本当に光栄」というのが私の気持ちです。そして、自分がより力強く、より勇敢になったように感じました。この賞は、身に着けたり、部屋に飾ったりするための金属やメダルではありませんが、私の歩みを前に進め、私に自信を持たせてくれる励みになります。私の活動を支えてくれる人たちがいることを、私に教えてくれます。私たちは結束しています。すべての子どもたちが良質な教育を受けられることを確実にしたいです。それだけに、この賞は、私にとって本当に素晴らしいものです。

ただ、ノーベル平和賞に決まったことがわかっても、学校を早退する気はありませんでした。むしろ、ちゃんと授業を終えよう、と。物理の授業に行き、英語の授業に行きました。まったくいつも通りの一日だったと思います。先生方や同級生たちの反応はとてもうれしいものでした。みんなが私のことを「誇りに思うよ」って言ってくれて、本当にハッピーでした。私を愛し、支えてくれる学校、先生方、同級生たちに心から感謝します。みんなに励まされ、助けられています。本当に幸せです。

ただ、ノーベル平和賞に選ばれたからといって、それが試験の役に立つわけじゃないですよね。こればっかりは自分のがんばり次第ですから。それでも、みんなに支えられていることが、私はうれしいです。

受賞が決まったからといって、これでおしまいではありません。これは私の活動のゴールではなく、ここからがスタートなのだと思います。すべての子どもたちに学校へ行ってほしい。いまだに５７００万人もの子どもたちが教育を受けられず、小学校にすら通えていません。すべての子どもたちに学校へ行って、教育を受けてもらいたいです。

私自身、（パキスタンの）スワート渓谷で同じ境遇にいました。ご存じの通り、そこはタリバーンの支配下にあり、学

校に行くことが許されていませんでした。当時、私は自分の権利のために立ち上がり、声を上げると言いました。誰かがどうにかしてくれるのを待っているような余裕はありませんでした。

そこには、二つの道しかありませんでした。声を上げずに殺されるのを待つか、声を上げて殺されるか。私は後者を選びました。当時はテロの恐怖があり、女性は家の外に出ることが許されず、女子教育は完全に禁じられ、そして人々は殺されていました。でも、私は学校に戻りたかった。だから、声を上げたのです。私も教育を受けられない女の子の一人でしたが、学びたかったのです。勉強をして、将来の夢を実現したかったのです。

普通の子どもと同じように、私にも夢がありました。あのころ、私は医者になりたいと思っていました。でも、今は政治家になりたいです。それも、良い政治家に。

学校に行けないと聞いたとき、もう医者にはなれないんだな、と思いました。なりたいものになれるなんてことはなくなるんだなって。きっと、１３か１４歳で結婚するような人生を送るんだろうなって。学校にも行けず、なりたいものにもなれず。だから、声を上げようって決めたんです。

自分の経験を通じて、世界中の子どもたちに、権利のために立ち上がらないとダメだよって伝えたいです。誰かを待っていてはダメなんです。子どもたちの声はずっと力強いんです。弱っちくみえるかもしれないけど、誰も声を上げない時に声を上げれば、その声は大きく響き、みんなが耳を傾けざるを得なくなるのです。私のメッセージはこうです。万国の子どもたちよ、権利のために立ち上がれ。

私がいただくこのノーベル平和賞ですが、ノーベル賞委員会が私にだけくれるわけではないはずです。この賞は、声なき声の持ち主であるすべての子どもたちのためにあります。私は彼らのために語り、彼らとともに立ち上がり、自分たちの声を届けようという彼らの運動に連帯します。世界は彼らの声に耳を傾けなければなりません。子どもたちには権利があります。良質な教育を受け、児童労働を免れ、人身売買にあわないですむ権利が。そして、幸せな人生を送る権利があるのです。だから私はこうした子どもたちに寄り添います。今回の賞はまさに彼らのためのもの。彼らに勇気を与えるものなのです。

最後に、尊敬するカイラシュさんと電話でお話ししたことをお伝えします。名字をきちんと発音できなくてごめんなさい。カイラシュさんとだけ呼んでもいいでしょうか。

つい先ほど彼と電話で、すべての子どもが学校に通い、良質な教育を受けることがいかに大切か、話し合いました。また、どれほどたくさんの災いが世間から知られないまま、子どもたちに及んでいるかについてもです。こうした問題に取り組み、子どもたちが良質な教育を受け、災いにあわなくてもすむよう、２人で一緒に行動しようと決めました。

また、カイラシュさんがインド出身、そして私がパキスタン出身ということで、両国の強い関係を築き上げるよう努力していきます。ご存じの通り、両国の国境は緊迫し、状況は私たちが望まない方向へと進んでいます。インド、パキスタンの関係が良好であってほしいです。緊張状態にあるのは本当に残念で、悲しいことです。両国には対話をし、和平について話し合い、進展について考え、開発を進めていってほしいと思うからです。どちらの国も戦いではなく、教育や開発、発展に専念することが重要です。それがお互いにとって良いことなのですから。

だから２人で決めました。カイラシュさんには、尊敬するインドのモディ首相に１２月のノーベル平和賞授賞式に出席するようお願いしていただきます。そして、私も尊敬するパキスタンのシャリフ首相に出席をお願いすると約束しました。

私からも両首相に、ぜひ参加をお願いします。私は心から平和の力を信じています。寛容と忍耐の力を信頼しています。両国が発展するためには平和で良好な関係が何より重要です。それが、両国が成功し、発展するための道筋です。謹んでお願いします。どうか、お二人が聞き届けてくれますように。

最後になりましたが、皆様の支援に心から感謝しています。私は自分がノーベル賞に値するとは思わないと言ってきました。今もそう思っています。この賞は、これまで私がやってきたことに対するご褒美であるだけではなく、私が活動を前に進め、継続できるように、私に希望と勇気をくれるものです。自らを信じ、自分がひとりぼっちではなく、数百、数千そして数百万人もの人に支えられていると知るためのものです。

いま一度、みなさまにお礼を申し上げます。　　（スクリプトと和訳は、朝日新聞１０月１２日）

続報　マララさん、今年の「世界子供賞」を受賞しました。

２０１４．１０．２９

子供の権利擁護に貢献した人や組織を顕彰する今年の「世界子供賞」に選ばれたパキスタンのマララ・ユスフザイさん（１７）が２９日、スウェーデンのストックホルム郊外で授賞式に出席、演説で「権利向上を求めるのは大人や政治家の仕事ではない」と述べ、他人の支援を待つのではなく子供たち自身が声を上げる重要性を強調した。

マララさんは、同賞受賞が各国の子供たちによる投票で決まったことに触れ「本当にうれしい。子供自身が声を上げつつある」と歓迎した。

世界子供賞は子供が中心となって組織し、人権などを学ぶ教育プログラムの一環として２０００年に創設された。

マララさんのスピーチ (英文)

I am feeling honored that I am being chosen as the Nobel laureate. And I have been honored with this precious award, the Nobel Peace Prize.

And I am proud that I am the first Pakistani, and the first young woman or the first young person who is getting this award. It is a great honor for me.

And I am also really happy that I am sharing this award with a person from India whose name is Kailash Satyarthi. And his great work for child's rights, and his great work against child slavery. It totally inspires me.

And I am really happy that there are so many people who are working for child's rights, and I am not alone. And he totally deserved this award. So I am feeling honored that I am sharing this award with him.

He received this award, and we both are the two Nobel award receivers. One is from Pakistan, and one is from India. And one believes in Hinduism, one strongly believes in Islam. It gives a message to people of love, between Pakistan and India, and between different religions. And we both support each other.

It does not matter what the color of your skin is, what language you speak, what religion you believe in. It is that we should all consider each other as human beings, and we should respect each other. And we should all fight for our rights, for the rights of children, for the rights of women and for the rights of every human being.

First of all I would like to thank my family, my dear father and my dear mother for their love, for their support. As my father always says, he did not give me something extra. What he did was that he did not clip my wings.

So I am thankful to my father for not clipping my wings, for letting me fly and achieve my goals. For showing to the world that a girl is not supposed to be a slave, a girl has the power to go forward in her life. And she is not only a mother, and she is not only a sister, and she is not only a wife —— but she should have an identity, she should be recognized. And she has equal rights as a boy.

Even though my brother thinks that I am treated very well and they are not treated very well …… but that's fine!

I would like to share with you how I found out about the Nobel Peace Prize. It is quite exciting because I was in my chemistry class and we were studying about electrolysis and cathodes. And the time was I think 10:15, so the time of the announcement of the Nobel Peace Prize was gone. And before that I was not expecting that I would get this award. So when it went to 10:15, I was totally sure that I had not won it. But then suddenly one of my teachers came to the class and she called me and she said,"I have something important to tell you". And I was totally surprised when she told me "congratulations, you have won the Nobel Peace Prize, and you are sharing it with a great person who is also working for children's rights".

It is sometimes quite difficult to express your feelings. But I felt really honored. I felt more powerful and more courageous, because this award is not just a piece of metal or a medal that you wear or an award that you keep in your room. This is an encouragement for me to go forward, and to believe in myself, and to know that there are people who are supporting me in this campaign, and we are standing together. We all want to make sure that every child gets quality education. So this is really something great for me.

However, when I found that I had won the Nobel Peace Prize, I decided that I would not leave my school. Rather I would finish my school time. I went to the physics lesson. I learned. I went to the English lesson. And it was totally like a …… I considered it was a normal day. And I was really happy with the response of my teachers, and my fellow students. They were all saying that they were proud of me. I am really thankful to my school, to my teachers, to my school fellows for their love, for their support. And they really encourage me, and they are supporting me. So I am really happy.

Even though it is not going to help in my tests and exams; that totally depends on my hard work, but still, I am really happy that they are supporting me.

I have received this award, but this is not the end. This is not the end of this campaign which I have started. I think this is really the beginning. I want to see every child going to school. There are still 57 million children who have not received education, who are still out of the primary schools. And I want to see every child going to school and getting an education.

Because I have myself suffered in the same situation when I was in the Swat Valley. And you all may know that in Swat there was Talibanization, and because no one was allowed to go to school. At that time I stood up for my rights, and I said that I would speak up. I did not wait for someone else.

I had really two options. One was not to speak and wait to be killed. And the second was to speak up and then be killed.

And I chose the second one. Because at that time there was terrorism, and women were not allowed to go outside of their houses, and girl's education was totally banned, and people were killed. At that time I needed to raise my voice because I wanted to go back to school. I was also one of those girls who could not get education. I wanted to learn. I wanted to learn and be who I can be in my future.

I also had dreams; like a normal child has.

I wanted to become a doctor at that time, now I want to become a politician, a good politician.

And when I heard that I could not go to school, I just for a second thought I would never be able to become a doctor. I would never be able to be who I wanted to be in future. And my life would just be getting married at the age 13 or 14. Not going to school, not becoming who I really can be. So I decided that I would speak up.

So through my story, I want to tell other children all around the world that they should stand up for their rights. They should not wait for someone else. And their voices are more powerful. It would seem that they are weak, but at the time when no one speaks, your voice gets so louder that everyone has to listen to it. Everyone has to hear it. So it is my message to children all around the world; that they should stand up for their rights.

The award that I have received: The Nobel Peace Prize, I believe that the Nobel committee, they have not just given it to me. But this award is for all those children who are voiceless, whose voices need to be heard. And I speak for them, and I stand up with them, and I join them in their campaign that their voices should be heard —— that they should be listened to. And they have rights. They have the right to receive quality education. They have the right not to suffer from child labor, not to suffer from child trafficking. They have a right to live a happy life. So I stand up with all those children. And this award is especially for them, it gives them courage.

At the end, I would like to share with you that I had a phone call with honorable Kailash. I cannot pronounce his surname accurately, so I ask for forgiveness for that. I will just call him Kailash, if he wouldn't mind.

So I had a phone call with him right now, and we talked about how important it is that every child goes to school and gets quality education. And how many issues there are: that the children that are suffering and are not yet highlighted. We both decided that we will work together for this cause, that every child gets quality education and not suffer from these issues.

Other than that, we also decided as he is from India, and I am from Pakistan, we will try to build strong relationships between India and Pakistan. And nowadays, you know, that there is tension on the border, and the situation is getting …… it is not like as we are expecting. We want Pakistan and India to have good relationships. And the tension that is going on is really disappointing, and I am really sad because I want both the countries to have dialogue, to have talks about peace and to think about progress, to think about development. Rather than fighting with each other, it is important that both the countries focus more on education, focus more on development and progress —— which is good for both of them.

So we both decided, and I requested to him, would it be possible to request the honorable Prime Minister Narendra Modi to join us when we receive the Nobel Peace Prize in December, and I promised him that I would also request that the honorable prime minister of Pakistan, Nawaz Sharif, to join us when I get, and he gets the Nobel Peace Prize.

And I myself request the honorable Prime Minister Narendra Modi, and honorable Prime Minister Nawaz Sharif that they both join us when we receive the Nobel Peace Prize. I really believe in peace, I really believe in tolerance and patience, and it is very important for the progress of both the countries that they have peace, and that they have good relationships. This is how they are going to achieve success, and this is how they are going to progress. So it is my humble request, and I hope that it will be heard, it will be listened to.

And at end, I want to say that I am really happy for your support. I used to say that I think that I do not deserve the Nobel Peace Prize. I still believe that. But I believe that it is not only an award for what I have done, but it is also an encouragement for giving me hope, for giving me the courage to go and continue this campaign. To believe in myself, and to know that I am not alone, and there are hundreds, and thousands, and millions who are supporting me.

So, once again, thank you so much to all of you.